

早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究（人文科学・社会科学編）第六十七号 四九一六〇頁、二〇一九年三月

# 病身の語り手が紡ぐ絆

—堀辰雄「燃ゆる頬」論—

宮村 真紀

## はじめに

堀辰雄「燃ゆる頬」〔『文藝春秋』一九三二・一、一九三三年二月に四季叢書第参篇として、四季社刊行の単行本『麦藁帽子』に収録〕は、語り手の「私」が、少年時代の記憶を語った物語である。先行研究では、少女達との異性愛へと移行していく過渡期にある「私」と三枝という少年との一時的な恋愛の物語とする解釈<sup>(1)</sup>や、末尾で肺結核に罹患した「私」が、サナトリウムで脊椎カリエスを患う少年と出会うことによって、同じ病気で死亡した三枝に対する愛情を認識する物語とする解釈<sup>(2)</sup>があった。いずれにしても、「燃ゆる頬」は、高等学校時代の「私」と、三枝という少年との恋愛の記憶を語った物語であるという解釈は共通していると言えよう。

「燃ゆる頬」の冒頭では、「私」が性的な事柄に反発を覚えながらも、それに対する関心を深めていく描写がある<sup>(3)</sup>。そして三枝との交流は、「私」の性的な事柄への関心の萌芽の延長線上にあるかのような物語の構造となっている。一方で、「或る半島」への旅行の帰り道で別れる「私」と三枝との関係性は「愛の休止符」と語られ、三枝と疎遠になったことについて、「少女らの異様な声が私の愛を変えてゐた」と語られている。これらの語りから、語り手の「私」は、身体的接触を欲望すると言う意味での性的な関心の対象として、また精神的な繋がりを持つ相手として、三枝のことを位置づけていると言えるだろう<sup>(4)</sup>。

しかし、「燃ゆる頬」が、少年期の「私」と、三枝という少年との恋愛（精神的な繋がり・身体的欲求を含める）の記憶を、語り手の「私」が回想した物語であるという自明の解釈は、問い直される必要があるのではないか。テキスト内には、「私」の三枝に対する強い憧

懐の感情や、極めて親密と言える交流が回想されている。しかし、両者の関係性を「愛」と名付け、両者の交流における身体的接触を、性的な行為に繋がるものとして意味づけているのは、現在回想している「私」の語りであることに留意しなければならない。

テキストの中には、後述するように、語られる「私」の認識と、語る「私」の認識が、異なっていることが示唆されている箇所がいくつかある。また、前述の通り、語り手は、両者の関係性あるいは「私」の三枝に対する心情を「愛」と名付ける一方で、両者が親密になった時を「いつしか友情の限界を超え出したやうに見えた」、三枝の手紙を「ラヴ・レタアのやうな手紙」と語り、「友情」を超えた、あるいは「ラヴ・レタア」であったと断言することはない。このような語りの僅かな揺らぎに、三枝を巡る語り手と、語られる「私」の認識のずれが示唆されているのではないか。堀辰雄文学において、記憶を語る――とりわけ〈死者の記憶を一人称で語る〉というのは主要なモチーフのひとつである。本論では死者の記憶を語るというモチーフの原点として「燃ゆる頬」を位置づける。<sup>(5)</sup>〈寄宿舎で生まれた少年同士の愛〉というややステレオタイプな解釈にはめこまれてしまう傾向があった「燃ゆる頬」を、堀文学における記憶の語り方において、重要な問題が組み込まれた作品として、見直していくことが目的である。

このことに留意すると、「燃ゆる頬」は、少年期における三枝との恋愛を、語り手の「私」が回想した物語というよりは、少年期の三枝との親密な関係性を、「愛」と名付け、両者の交流が、性的な行為に

繋がるものとして解釈している物語<sup>(6)</sup>と言えるのである。先行研究ではあまり指摘されてこなかった、語られる「私」と語る「私」との間のずれを抽出し、語る「私」の戦略を炙り出そうとすることが本論の試みである。少年期の恋愛体験の回想という解釈を自明とすることは、現在の視点から、両者の関係を「愛」と解釈し、両者の交流を性的な行為に繋がる行動であったかのように語る、語り手の「私」の作業を閉却することになると言えよう。

末尾で、「私」が当時の不治の病である肺結核に罹患することが回想されていることから、その後の姿である語り手の「私」も肺結核を患っていると見られる。「燃ゆる頬」は、現在病身にある語り手が、罹患する以前の少年期を主に回想した物語と言うことも出来るだろう。このことを踏まえて、三枝との関係性を「愛」と名付け、両者の接触到性的な意味を付与しようとする語り手の試みの目的、語られる「私」と語る「私」との齟齬が備える意味、そして語る「私」が三枝をどのような存在として位置づけたかを明らかにしていきたい。

本稿は前述の一九三三年十二月に四季社から刊行された『麦藁帽子』に収録された際の「燃ゆる頬」のテキストを分析対象とする。また、語られる「私」（寄宿舎にいた少年期から卒業後に発病してサナトリウムに入る）を「私」、語る「私」を語り手と表記する。

## 一 「私」と三枝の対照的な語られ方

最初に、少年時の「私」の認識と、語り手の認識のずれがどのように表象されているかを確認していきたい。本節では、親しくなり始めた頃の「私」と三枝との交流の回想において、語り手がいかにして性的接触に繋がる要素を見出しているかを考察する。「私」が、寄宿舎の同じ部屋に転室してきた三枝と親しくなったきっかけとして、二つの夜の出来事が語られている。一度目の夜は、体調不良のために早めの夜に寝室にきた「私」が、三枝に「喉が痛い」ことを告げ、彼が「私」の顚顚に手を当てたり、脈を測ろうとして手頸を握ったりする場面が回想される。その行為自体は何気ない交流と言えるが、脈を測ろうとした三枝について、「私の脈を見るのにしては、それは少しへんてこな握り方」と語り手が評価を加えることで、あたかも脈を測るようを見せて、性的な欲望から、三枝が「私」の体に触れたかのような印象が付与される。「自分の脈搏の急に高くなつたのを彼に気づかれはしまいか」と案じる〈純粹〉な「私」と、三枝の行動に隠れた意図を読み取ろうとする語り手のずれがこの場面で露呈するのである。さらに二度目の夜における「私」と三枝の接触は、次のように回想されている。

「ぢや、消すよ……」(略) 彼は私の枕許の蠟燭を消すために、彼の顔を私の顔に近づけてきた。私は、その長い睫毛のかげが蠟燭

の光りでちらちらしてゐる彼の頬を、ちつと見あげてゐた。私の火のやうにほてつた頬には、それが神々しいくらゐ冷たさうに感ぜられた。

ここで語られるのは、長時間外出していた三枝に対し、「私」がどこに行つていたのかを訊ね、彼が「私」の枕もとの蠟燭を消すという〈何気ない〉交流である。だが、「顔を私の顔に近づけ」という表現は、身体的接触を意図しているかのような表現と言えよう。闇の中で蠟燭の光に照らされた三枝の顔は神秘的なイメージを付与される。それを「神々しいくらゐ冷たさう」と見る「私」は、三枝に憧憬の念を抱く〈純粹〉な少年として位置づけられ、性的な意図を持つて「私」に接近するかのようには語られる三枝と対比されている。

三枝と親しくなる前の「私」は、「薔薇いろの頬の所有者」で「瘦せた、静脈の透いて見えるやうな美しい皮膚の少年」である彼の「貧血性の美しさ」を兼ね備えた容姿に憧憬・羨望の念を抱き、教室で「ほっそりした頸」を「儼み見」、三枝に会うために早く寝室に行きたいと考えるやうな、三枝に憧れる〈ナイーブ〉な少年であることが強調されている。一方で、三枝は性的な接触を目論んで「私」に接触をする少年であるかのように語られることで、〈ナイーブ〉な少年である「私」と、性的な接触を目論む少年としての三枝という構図が、語り手によって形成される。この構図が、テキスト内でいかなる意味を持つかは、後に触れていきたい。

両者が親しくなつて後、「或る半島」に旅行した際に、旅館で「私」

が三枝の背中 of 突起を撫でる場面は、先行研究でも、両者の互いに対する性的な欲望を表した場面として解釈されてきた。<sup>(7)</sup>しかしこの場面を見てみると、必ずしも性的な欲望を三枝に対して抱いた体験としては語られていないのではないか。

寢床へ入らうとしてシャツをぬいでゐる、三枝の裸になつた背中に、一とこほだけ背骨が妙な具合に突起してゐるのを見つけた。私は何だかそれがいぢつてみたくなつた。そして私はそのところへ指をつけながら、／「これは何だい？」と訊いてみた。

（略）「それは脊椎カリエスの痕なんだ」／「ちよつといぢらせない？」／さう云つて、私は彼を裸かにさせたまま、その背骨のへんな突起を、象牙でもいぢるやうに、何度も撫でてみた。彼は目をつぶりながら、なんだか擦つたさうにしてゐた。（傍線部引用者、斜線は改行を示す、以下同様）

傍線部の「私」の言葉や内面の表象を見ると、この時の「私」は軽い好奇心から、三枝の背中 of 突起を撫でたと言える。「象牙でもいぢるやうに」という形容は、傷つけないように配慮しながら高級な物に触れるという意味から、性的欲求というよりは、以前から抱いていた三枝に対する憧憬の現れと言えよう。極めて親密な接触ではあるが、友人に対するふざけ合ひの行為と解釈される体験として語られていると言える。このようにして「私」と三枝との関係性は、回想されている内容を見る限り、親密な友情とも憧憬とも解釈可能な、「愛」という形には必ずしも収斂できない関係性が表象されている。しかし「或

る半島」への旅行の体験が、両者の関係性を「友情の限界を超え出したやうに見えた」という語り手の批評の後に置かれることで、先行研究において、性的な欲望を示唆した場面と解釈されたのではないか。三枝に憧れる（ナイーブ）な「私」に対し、「私」に性的な目的をもって誘惑しようと接近する美しい容姿を持った三枝、この構図は、「燃ゆる頬」を最後まで読むと、ある事柄を示唆する機能を備えているのである。

## 二 「私」を束縛する三枝というイメージ

前節では、性的な接触を目的として「私」に接近する三枝と、（ナイーブ）な「私」という構図を語り手が打ち出していることを確認してきた。次の「或る半島」への旅行で、少女達と出会った体験は、次のように語られている。この場面では、前節以上に「私」と語り手の認識の差異が露わになる。

私はそれらの少女たちの中から、一人の眼つきの美しい少女を選び出すと、その少女ばかりちつと見つめた。（略）そんな場合にあらゆる若者がするであらうやうに、私は短い時間のうちに出来るだけ自分を強くその少女に印象させやうとして、さまざま動作を工夫した。（略）そのとき突然、三枝が歩みを弛めた。そして彼はその少女の方へづかづかと近づいて行つた。私も思はず立ちどまりながら、彼が私に先廻りしてその少女に馬車のことを尋

ねようとしてゐるらしいのを認めた。／私はさういふ彼の機敏な行為によつてその少女の心に彼の方が私よりも一さう強く印象されはすまいかと気づかつた。(略)少女はさも可笑しくつて溜らないやうに笑つた。それにつれて、他の少女たちもどつと笑つた。よほど私の問い方が可笑しかつたものと見える。私は思はず顔を赤らめた。その時私は、三枝の顔にも、ちらりと意地悪さうな微笑の浮んだのを認めた。／私は突然、彼に一種の敵意のやうなものを感じ出した。

この場面は、少女達の登場によつて、「三枝はたちまちライバルへと転じ」た「三角関係における心理的な葛藤」の場面という指摘、「少女達との恋愛においては互いがライバルであることを認識する」という指摘が行われて来た。つまり、少女が登場すると、親密な関係であつた「私」と三枝が少女の関心を巡つて対立し、それが「スクール・ボーイ」の「同性愛的世界」から「異性愛」の「目覚め」へと続く、「境界の時間」についての物語<sup>[1]</sup>であるという作品の解釈を導く場面であつたという分析が、先行研究では主流であつた。しかし、次の点に注目すると、少年の異性愛への目覚め、「私」と三枝との対立という解釈をこの場面に当てはめることは適切ではない。確かに「私」自身は、三枝と「眼つきの美しい」少女の関心を争っているという認識であつたかもしれないが、語り手はこの時の記憶から、少女の関心を二人の少年が争うという構図とは全く別の構図を見出ししている。

波線部における「眼つきの美しい少女を選び出す」「あらゆる若者

がするであらうやうに(略)さまざまな動作を工夫した」という、「私」のやや人為的ともいえる行動を見ると、「私」は、異性に関心を持たなければならぬという規範に則つて、異性の気をひくためのマニュアルに基づいた行動を取つていたものとして語られていると言える。しかし、少なくとも「私」は「眼つきの美しい少女」に魅了され、彼女を凝視していた。一方で、三枝がその少女に話しかけたことで、彼女が魅了されるのではないかということを案じている。「私」自身は、三枝と「眼つきの美しい少女」の関心を争っている認識であつたと言えるだろう。

一方で三枝が少女に話しかける時は、波線部のように、「私」が少女に話しかけようとした時、三枝が「突然(略)歩みを弛め」というタイミングと、少女へ「づかづかと近づいて行つた」と、遠慮なく歩み寄るといふニュアンスの表現から、この時の三枝が、少女に好意を持つて接近しようとする欲望ではない、何らかの感情に囚われていたことが示唆されている。前節で、三枝が性的な意図を持つて「私」に接近してくる構図を語り手が打ち出していることについて言及したが、この時の三枝は、「私」の関心が自分ではなく少女に移ることに反発し、両者の間に親密性が生まれることを避けるために少女に話しかけ、少女と「私」との間に介入したということを語り手は示唆しようとしているのではないか。

「私」の発言に少女達が可笑しがつて笑つた―つまり、「私」が異性として少女達に関心を持たれる可能性が低くなつた―時、三枝が「ち



らりと意地悪さうな微笑」を浮かべるのを見て、「突然、彼に一種の敵意のやうなもの」を感じ始める。「敵意」とあることから、少年の「私」は、依然として三枝を、少女達の関心を争う相手として見ていると言えるだろう。少女達に笑われ、異性として見られなくなったであろうことを喜ぶ三枝の姿を、少女に関心を抱いているためと認識する「私」に対し、語り手は三枝が「私」を束縛しなかったためであるという解釈を示唆している。当時の三枝の心理を語り手が解釈し、彼の（真意）に気づくことなく、少女を争っていると〈誤解〉する「私」の姿を示唆することによって、「私」と語り手とのずれが明確となっている。よって、「同性愛的な雰囲気を経験していた」「スクール・ボーイ」が「学校の世界を離れてからは、異性愛的な世界にめざめていく」物語に「燃ゆる頬」を当てはめるのは、必ずしも適切ではない。語られている「私」の位相から見れば、少女への関心のために親密な少年を「敵視」とするという物語となるが、語り手はそこに新たな解釈を加えているのである。この場面からは、「私」はそのことを自覚していないが、三枝が「私」を束縛しようとしていた構図が浮上してくる。三枝の生前の記憶は、このように、語り手と語られる「私」との二重構造が示唆され、三枝は「私」を誘惑し、束縛しようとするが、「私」の側はそのことに無自覚であるという構図が浮上する。語り手はこの構図を打ち出すことによって、何を表象しようとしているのか。次節以降で、三枝死後にサナトリウムに入院した「私」の表象を確認した後に、語りの意図を明らかにしていきたい。

### 三 同病者としての共感

「私はその後、三枝には会わなかった」と語られる通り、「或る半島」への旅行後、「私」が三枝と疎遠になっていく様子が回想されている。父と共に「信州の或る湖畔」に滞在した「私」に、三枝が「まるでラヴ・レタアのやうな手紙」を送るが、「少女らの異様な声」によって、次第に「私」は返事を出さなくなり、脊椎カリエスが再発したという三枝の手紙も黙殺したまま、三枝は病死する。その後、高等学校を卒業した「私」は、「多くの異様な声をした少女たち」と出会い、「彼女らのために苦しむことを余りにも愛」する生活を送るようになる。

「少女らの異様な声が私の愛を変えてゐた」とする語り手は、「或る半島」の少女達との出会いによって、「私」が同性である三枝との「愛」を卒業して、異性愛へと関心を移したという枠組の中に、三枝と疎遠になった記憶を位置づけようとしているかに見える。しかし、末尾で発病した「私」が、サナトリウムに入院した時の回想を見ると、一見同性愛から異性愛への移行の枠組で語ろうとしているように見える。三枝との関係性の記憶から、別の構造が浮上してくるのではないか。「私」の発病の経緯は、以下のように語られている。

私ははげしい咯血後、嘗て私の父と旅行したことのある大きな湖畔に近い、或る高原のサナトリウムに入れられた。医者は私を肺結核だと診断した。が、そんなことはどうでもいい。ただ薔薇が

ほろりとその花卉を落すやうに、私もまた、私の薔薇いろの頬を永久に失ったまでのことだ。／私の入れられたそのサナトリウムの「白樺」という病棟には、私の他には一人の十五六の少年しか収容されていなかった。／その少年は脊椎カリエス患者だったが、もうすっかり恢復期にあつて、毎日数時間ずつヴェランダに出ては、せつせと日光浴をやつてゐた。私が私のベッドに寝たきりで起きられないことを知ると、その少年はときどき私の病室に見舞にくるやうになつた。

「私」は当時不治の病であつた結核を発症した。しかも、「はげしい咯血」をして入院し、「寝たきりで起きられない」状況になつてゐる「私」の病状は比較的重篤であつたと見られる。三枝の記憶を回想している語り手である「私」は、記憶を回想できる程度には回復していると見られるが、依然として肺結核に罹患していることには変わりがない。肺結核という医師の診断に対し、「が、そんなことはどうでもいい」と突き放すかのような語りから逆説的に浮上するのは、「私」(あるいはその後の「私」である語り手)の病あるいは死に対する恐怖である。<sup>(13)</sup> キューブラー・ロスは、末期症状の患者について、「死とか死ぬとかいうコトバはぜつたに使わない患者が多い。だがかれらは偽装されたかたちで、たえずそれについて語つてゐるのである」<sup>(14)</sup>と述べた。「そんなことはどうでもいい」という語りによって、「私」(及び語り手)にとつて、肺結核の罹患が決して「どうでもいい」わけではないことが表明されている。

その中で「私」は、「或る時」少年の「日に黒く焼けた、そして」唇だけがほのかに紅い色をしてゐる細面の顔」に、「死んだ三枝の顔が透かしのやうに現はれてゐる」ことを認識し、「なるべくその少年の顔を見ないやうに」なる。「透かしのやうに」という表現から、「私」が脊椎カリエスという共通点を持つ少年<sup>(15)</sup>に対し、積極的に三枝の面影を読み込んでいたことが強調されている。少年の顔を「見ないやうに」する「私」の心理は、三枝に返事を出さないまま、彼が死去してしまつたことに対する罪悪感<sup>(16)</sup>とも言えるが、死者の三枝の面影を回避しようとする「私」の表象には、「私」自身の「ひいては語り手の死に対する恐怖が表象されていると言えよう。さらにサナトリウムの少年に關して、「私」の次のような体験が語られる。

或る朝、私はふとベッドから起き上つて、こはごは一人で、窓際まで歩いて行つてみたい氣になつた。それほどそれは氣持のいい朝だつた。私はそのとき自分の病室の窓から、向うのヴェランダに、その少年が猿股もはかずに素裸になつて日光浴をしてゐるのを見つけた。彼は少し前屈みになりながら、自分の体の或る部分をちつと見入つてゐた。彼は誰にも見られてゐないと信じてゐるらしかつた。私の心臓ははげしく打つた。そしてそれをもつとよく見やうとして、近眼の私が目を細くして見ると、彼の真黒な背なかにも、三枝のと同じやうな特有な突起のあるらしいのが、私の目に入つた。／私は不意に目まひを感じながら、やつとのことのでベッドまで帰り、そしてその上へ打つ伏せになつた。／少年は

数日後、彼が私に与へた大きな打撃については少しも気がつかずに、退院した。

末尾の場面については、先行研究<sup>(17)</sup>において、「私」の中の三枝の存在の大きさを示す場面として、そして異性愛に関心を移した「私」が、少年に性的な関心を覚えることで、同性に惹かれる感情を残していた場面として解釈されることが多かった。しかし重要なのは、この場面が三枝の記憶が強いインパクトを持って立ちあがってきた体験の回想というよりも、少年の突起を見た後に「目まひ」を起こしたという「私」の体験をもって、語り手が、三枝の面影が強烈に「私」の中に立ちあがってきたという構図を作り上げようとしていることであろう。極論を言えば、少年の突起を見た後の「私」の「不意」の「目まひ」も、もともと彼自身が重篤な病によって「寝たきりで起きられない」状況であり、少年の突起を見た日も「こはこは」歩くような体調であったことから、少年から与えられた「大きな打撃」によるものではなく、病のための症状と解釈することも出来る。いずれにしても、語り手がこの「目まひ」をもって、「私」の中で三枝が強烈な存在であったと主張していることが重要なのである。

また、「或る部分」を凝視する少年に対して、「私」の心臓の動悸が激しくなり、彼を凝視したという語りの部分は、少年に対する「私」の性的欲求を示していると先行研究では解釈されてきた。<sup>(18)</sup>少年に対する性的な関心ではなく、病により、少女達との交流を断たれた「私」が、一人で性的な行為を行う少年に自己を投影させ、疎遠になつてい

たセクシャルな欲求を呼び覚まされただけであると解釈することも出来る。少年の突起を見る場面において留意すべきなのは、個々の描写を見ると、異なる解釈が可能であるにも関わらず、全体として読むと、「私」が少年の姿に性的関心を抱き、彼の背中に三枝と同じ突起を見つけて衝撃を受けた――つまり、亡き三枝の面影が強烈に「私」の中に立ちあがってきた場面として印象づけられている点である。

発病後の「私」が、亡き三枝の存在に支配され続けていると強調することに、語り手のどのような意図があったのか。三枝の突起が象徴的に浮かび上がる末尾の場面の意味は、前述の「私」の不治の病と無関係ではない。三枝の死後も「私」がその存在に強く支配され続ける様子を語る理由としては、一つ目に、肺結核に侵された現在、同じく結核菌による病に罹患した三枝へのシンパシーがあるだろう。アーサー・フランクは、「病む人は、自らの周囲、自らの前後に、同じ病を経験し、その人自身の完全に個人的な痛みを苦しんできた他者を見いだす。病む人は、自らの痛みによって他者の痛みを理解する」と述べたが、発病したという手紙を出しても「私」から返事を貰えず、そのまま「どこかの海岸へ転地」して孤独な死を迎えたであろう三枝と、発病後に、サナトリウムで孤独に過ごすことになった「私」の姿は重なり合う。

サナトリウムの少年に三枝の面影を見出し、彼の顔を「見ないやうに」する「私」の表象は、自らが孤独な病者となった現在、発病後に孤独な状況に置いてしまった三枝のことを連想したことを表している



と言える。このように考えると、「或る半島」への旅行で、「私」が三枝の背中突起を撫でる行為は、「私」が意識せずとも、結果として三枝に対する性的な行為となり得ていたという場面というよりも、「私」が三枝の病の傷跡―病者としての三枝を、意識的ではなくても受容したという場面として提示されていたとも言える。三枝との関係性を「愛」とする語りからは、代替不可能な存在として、三枝を位置づけようとしていると言えよう。「或る半島」の旅行からの帰り道、駅で三枝と別れる際の記憶は次のように語られる。

別れの時はもつとも悲しかった。私は、自分の家へ帰るにはその方が便利な郊外電車に乗り換えるために、或る途中の駅で汽車から下りた。私は混雑したプラットフォームの上を歩き出しながら、何度も振りかえつて汽車の中にある彼の方を見た。

例えば「私は（略）私の喉の痛みが何時までも療らなければいいとさえ思つてゐた」のように、語られる少年期の「私」が感じていたことを、語り手が語るといふ表現方法とは異なり、この場面における「悲しかった」には主語が書かれていない。語られる「私」の心情を回想しているだけではなく、この記憶を想起して語っている語り手の心情も「悲し」という感情の表出と言えるのではないか。少女達に関心に移したために、この後に三枝と疎遠になってしまったことに對する語り手の悔恨が現れていると言える。「或る半島」で「私」が魅了された少女達、そして卒業後に交流を持った少女達は、複数人数が「少女」と一括されて固有の名を与えられない。この表記から、少女

達が「私」にとって、三枝ほど代替不可能な存在ではなかったことが示唆されていると言えよう。<sup>(20)</sup>

「私」のサナトリウム入院後、交流の会った少女達と連絡のやり取りなどがあつたのかはテキストからは不明であるが、少なくとも「私」が、発病前よりも孤独な状況に置かれたことは確かであろう。三枝を蔑ろにして、選択した少女達とも、発病によって疎遠になっていく。このような孤独な状況に置かれた「私」（その後の語り手）が、病を分かち合える存在であつた三枝と疎遠になつたことを後悔し、親密であつた間柄を「愛」という強固な関係性に置き換えることで、悔恨をいくらか和らげようとする語り手の試みが窺える。依然として死病に脅かされる「私」は、同系統の病者である三枝との関係性に依拠することで、死病に罹患した自らの状況に対処しようとしているのではないか。「燃ゆる頬」は、語り手が病める者となつたことで、かつて疎遠になつた三枝との関係性に新たな解釈を加えようとする物語と言える。

語り手が病める者であつたことが、「燃ゆる頬」の末尾で明らかになることから考えると、前述したように、〈ナイーブ〉な「私」を誘惑し、束縛する者として語られた三枝の構図は、「私」そして語り手を脅かしている病あるいは死が、三枝に仮託されていると見ることができないのではないか。<sup>(21)</sup> 回想の中で三枝の美しく、セクシャルな容姿が強調されるのも、ジョルジュ・バタイユが「エロティシズムとは、死におけるまで生を称えること」と述べるような、死とエロティシズム

の問題も関連しているであろう。「私」は自覚しないが、美しい容姿を持った三枝が誘惑し、束縛しようとしてくるという構図によって、語り手は自らを取り込もうとする死病を表象したのではないかと見られる。同系統の病者としての三枝との関係性を代替不可能なものとして語り、三枝に死病を仮託して、〈美しい存在〉が自らを誘うイメージを形成する、このような表象が行われる「燃ゆる頬」には、死や病に対する恐怖が直接的には語られないがために、語り手が自らの死病をいかに語るかという試みの痕跡を見ることができるのである。

## 終わりに

「燃ゆる頬」の中で、三枝は二つの役割を与えられている。一つ目は、「私」と同系統の病に罹患し、孤独な最期を迎えたであろう存在としての共感の対象である。結果として病を分かち合えたであろうにもかかわらず、蔑ろにしてしまったという悔恨を和らげるために、両者の関係性が「愛」という強固な関係性へと読み替えられることとなった。二つ目は、無自覚な「私」を誘惑し、束縛するという役割である。ここには、後の「私」が罹患する肺結核という死病が、三枝に仮託され、死病が自らを脅かす一方で〈美しい〉ものであるととらえようとする試みがいられる。

このように、「燃ゆる頬」は、不治の病に罹患した語り手が、死に対する恐怖や孤独を、三枝という親密な関係にあった死者を媒介とし

て、対処しようとする語り手の試みが見られるテキストとなっており。病者となった現在から、健康であった頃の記憶を読み替える試みとも言えるだろう。

死者の記憶、とりわけ語り手と死者との関係性に、主人公及び語り手が解釈を加えていくという構造の物語は、「燃ゆる頬」以後、堀辰雄文学の中で継承されていくテーマでもある。<sup>(23)</sup>しかし、他の死者を語る堀文学作品と比較すると、「燃ゆる頬」は、ただ生者が支社を回想するだけではなく、生者が病に罹患し、死に瀕しているということが前景化している点が特徴的となっている。語り手が病者であることは、生者が死者との記憶を、自在に解釈して語るといっただけではなく、病身となった現在から、健康であった過去を想起し、当時の認識とは別の解釈を加えていくという側面を備えている。しかし、「燃ゆる頬」の語り手が行った、死者との関係性を特権化しようとする試みは、後の堀文学における記憶の物語にも継承されていく。

注1) 榎山朋子「『燃ゆる頬』」（『国文学 解釈と鑑賞』一九九六・九）では、少女の登場によって、少年達が「ライバルへと転じ」、「三角関係における心理的な葛藤が、スピード感のある乾いた筆致で描かれている」作品の一つと指摘され、禹朋子「ブルーストと堀辰雄——『燃ゆる頬』の主題をめぐって——」（『帝塚山学院大学研究論集（文学部）』二〇〇四・三）では、「燃ゆる頬」を、異性との出会いによって少年同士が「ライバルであることを認識」する「少年愛との別れの物語」と

指摘されている。また、同性愛から異性愛への移行という図式に対し、「一方でスムーズにはその移行を許さない抵抗も芽生えている」とする伊藤氏貴「同性愛者の誕生」同性愛文学の死—LGBT批判序説」（『文学界』二〇一六・三）のような指摘もある。

(2) 注(1) 前掲横山朋子論文では、サナトリウムで出会った少年から「私」が三枝を連想したことについて、「既に異性愛の世界にいる「私」は、少年の姿をきっかけに、かつて三枝を愛していたことを強く自覚したのではないか」として、この作品が「失われた少年期への、そしてまた、死によって隔てられた愛するものへの追憶の物語でもある」と論じられている。

(3) 「堀辰雄作品集第一・聖家族」あとがき「堀辰雄作品集第一・聖家族」角川書店、一九四九・三）において、堀辰雄は「燃ゆる類」について、「これは私のキタ・セクスアリスである」と語っているが、「燃ゆる類」の冒頭で、蜂に花粉を運ばれる雌蕊に対して反感を抱く「私」の姿、寄宿舎の少年達の「汚れた下着類のほひ」が、夢の中で「私」に、「見知らない感覚」を与える様子が語られる。

(4) 風間孝・河口和也「同性愛と異性愛」（岩波新書、二〇一〇・三）では、「男性と女性が交際することのなかには、パートナーとの性行為も含まれるだろうが、それ以外にも、会話や食事、買い物、旅行を楽しんだり、映画を見たりという数多くの要素から、二人の関係が成り立っている。（略）しかし同性どうしの交際がイメージされるときには、性行為が大半を占めるのではないだろうか」と根強い異性愛主義が引き起こす認識が指摘されているが、「燃ゆる類」における同性愛関係もまた、セクシャルな側面とすぐに結び付けられる傾向がある。

(5) 死者の記憶を一人称で語るテーマは、震災死した亡き母の記憶を語る「麦藁帽子」（『日本国民』一九三二・九）、結核に罹患した婚約者の病死を回想する『風立ちぬ』（『序曲』『風立ちぬ』：『改造』（一九三六・一二）、「序曲」の原題は「発端」、「冬」：『文藝春秋』（一九三七・一）、「春」：『新女苑』（一九三七・四、原題「婚約」、「死

のかげの谷』：『新潮』（一九三八・三））などに受け継がれている。

(6) 「燃ゆる類」は、一九三三年二月に単行本『麦藁帽子』（四季叢書第参篇、四季社）に収録される際、『文藝春秋』に掲載された初出のテクストから、改稿が施されている。初出では三枝との関係について「私」と彼との場合には、彼の方が女であることを認めた「魚住はすぐ、外国の町で自分の同国人を認めるやうな一種の直覚でもつて、私と三枝との関係を見抜いたらしかつた」と、少年時の「私」が、三枝との関係性を恋愛と認識していた箇所があった。しかしこの部分は定本では削除されている。あくまで本論の分析対象は定本のテクストであるが、この改稿後の「燃ゆる類」は両者の関係性が恋愛と明記されないようになったと言える。渡部麻実「堀辰雄『燃ゆる類』論—コクトーからラディゲへ」（『山邊道』二〇〇九・一一）では、初出からの改稿について、「セクシャルの如何にこだわらない官能の目覚め」の物語となったことを指摘した。

(7) 注(1) 前掲の伊藤氏貴論では、この場面について、さらに三枝と深い接触が行われたことを「隠蔽」としていると指摘されている。

(8) 増田匡裕「恋愛関係における排他性の研究」（『実験社会心理学研究』一九九四）では、恋愛関係にある二者間で行われる「恋愛行為群」の各行為は、「恋愛関係のみにおいて排他的に行われるべき行為（つまり儀礼的行為）」と「恋愛関係以外の関係においても許される行為」に分類される、しかし「単純に二分割」されるわけではなく、「恋愛関係としての儀礼性の最も高い行為から、最も低い行為までの一次元性をもつ序列」がその行為群にはあると指摘されている。「私」と三枝との間のコミュニケーションは、後者に分類されると見て良い。

(9) 注(1) 前掲横山朋子論文。

(10) 注(1) 前掲横山朋子論文。

(11) 吉川豊子「ホモセクシャル文学管見」（『日本文学』一九九二・一一）  
(12) 中沢新一「解題 浄のセクソロジー」（中沢新一編『南方熊楠コレクション 第三巻 浄のセクソロジー』河出書房新社、一九九一・一〇）

- (13) 佐藤高明「堀辰雄の考察」〔阿南工業高等学校研究紀要〕一九六七・二〕では、「カリエス少年の顔に、かつて死んだ友人の面影を認めただけで、あたかも自己の死の到来を不安がるように心が動揺し、死からの脱出を図るため、少年から遠ざかるうとしたことを描いている」と、「私」が三枝を想起する時の死に対する不安について言及している。中野綾子「戦場で（堀辰雄）を読む―戦没学生の読書体験と学校小説『燃ゆる頬』論―」〔近代文学 研究と資料〕第二次第四集、二〇一〇・三〕で指摘される「昭和後期において少年愛を語ることに対する様々な障害」があったことを考慮したとしても、論考によっては、三枝と「私」の関係性を恋愛ではなく友人同士と解釈することも可能であったことが示されていると言えよう。
- (14) E・キューブラー・ロス、川口正吉訳『死ぬ瞬間 死にゆく人々との対話』（読売新聞社、一九七一・四）
- (15) 初出では、「死んだ三枝の顔がはつきり現はれてゐるのに気づいた」という「私」が意図せずとも三枝の面影が立ち現れる表現となっており、定本に改稿されることで、「私」が三枝の面影を読み込むニュアンスが強まっている。またサナトリウムの少年は、初出では「薛」という名の「支那人」の少年であったことが語られている。彼の固有名詞と外国の少年であることが明記されることで、三枝とは別人であることが強調されるが、定本では少年の名や属性は一切語られないため、あたかも少年が三枝の分身であるかのような表現となっている。
- (16) 亀井秀雄「燃ゆる頬」（『国文学 解釈と教材の研究』一九六九・六）などで、三枝の発病に対し、何のレスポンスも行わなかった「私」の罪悪感が指摘されている。
- (17) 注(2) 前掲
- (18) 注(1) 前掲伊藤氏貴論、田中雅行「『燃ゆる頬』試論―堀辰雄論のための覚え書―」（『名古屋近代文学研究』一九九〇・一二）などで、少年に対する「私」のセクシャルな関心が指摘されてきた。
- (19) アーサー・W・フランク、鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手 身体・病い・倫理』（ゆみる出版、二〇〇二・二）
- (20) 注(13) 前掲中野綾子論文では、卒業後の「私」が「愛してゐた」のは「苦しむこと」であり、少女達そのものではなかったことが指摘されている。
- (21) 「私」の死の恐怖については、注(13)の佐藤高明論文でも指摘されているが、本論では、サナトリウムの少年の顔を見た時だけではなく、病者となった立場から健康であった時期を回想する中で、三枝に死を仮託させる語りを行っていると思われるので、やや異なる立場をとる。
- (22) ジョルジュ・バタイユ、澁澤龍彦訳『エロティシズム』（二見書房、一九七三・三）
- (23) 注(5) に同じ。
- (24) 生者が死者の記憶を自在に解釈するという問題とはやや異なるが、エゴイステイックな生者の問題として、竹内清美『風立ちぬ―支配の構造―』（竹内清己『堀辰雄の文学』桜楓社、一九八四・三／初出『語文論叢』一九八一・九）では、『風立ちぬ』のように「もう一人の他者、それも病人で死にゆく人を傍においている場合」「他者支配の意志、さらには他者離隔といったものの潜行があるとして、堀辰雄文学を「健康―強者―悪の文学」という指摘が行われている。

※本文の引用は全て『堀辰雄全集』第一巻（筑摩書房、一九七七・五）に拠った。ルビ・傍点は省略し、旧字体は適宜現行の字体に改めた。

※本稿は、日本文学協会第34回研究発表大会（於いわき明星大学、二〇一四年七月一二日）における発表に基づく。発表の際に貴重なご意見・ご教示を賜りましたことを心より御礼申し上げます。